

もう一つの「半牀庵」

竹 鼻 圭 子

要 旨

大手前大学西宮キャンパスの安藤忠雄氏設計アートセンターの敷地内には、草庵様式の茶室「竹立庵」がある。明治から大正初期に大阪北浜で活躍した株仲買人岩本栄之助（1877－1916年）が当時100万円（現在の価値で約50億円とも80億円ともいわれる）を寄付して大阪中央公会堂が建設されたことは有名である。この敷地はかつて栄之助の別邸であったが、彼が営んだ茶室が福井有大手前学園理事長の意志があって、保存されて来たのだ。教養人でもあった栄之助を偲ばせる三畳台目の本格的な中板の席である。本稿では茶道の持つ文化的意義に焦点を当て、竹立庵を巡る文化の諸相を明らかにしたい。まず茶の湯の文化的意義について、伝統日本文化の多分野継承システムとしての茶の湯と *The Book of Tea* に見られる岡倉天心の茶の心の2つの側面から検討する。そして、竹立庵を巡る時空を越えた文化の営みについて、竹立庵を営んだ岩本栄之助、竹立庵の本歌あるいはオリジナルとされる京都久田家半牀庵、そしてその半牀庵を好んだ（デザインした）とされる江戸中期の千家長老久田宗全といった側面から検討する。

キーワード：茶道、茶室、日本伝統文化、茶の本、生の技

1. はじめに

大手前大学西宮キャンパスの安藤忠雄氏設計アートセンターの敷地内には、草庵様式の茶室「竹立庵」がある。明治から大正初期に大阪北浜で活躍した株仲買人岩本栄之助（1877－1916年）が当時100万円（現在の価値で約50億円とも80億円ともいわれる）を寄付して大阪中央公会堂が建設されたことは有名である。この敷地はかつて栄之助の別邸であったが、彼が営んだ茶室が保存されて来たのだ。教養人でもあった栄之助を偲ばせ

る三疊台目の本格的な中板の席である。2004年4月からは武者小路千家官休庵家元千宗守客員教授の「日本文化の伝統」の講義が始まったが、その実演の教場としても活躍している。

また、竹立庵が名高い久田家半牀庵の写しであるらしいことが判ってきている。久田家といえは三千家と並ぶ茶家であり、官休庵当代家元の祖父である官休庵九代愈好斎(1889-1953)は久田家出身である。愈好斎は東京帝国大学史学科を卒業し、茶の湯の世界に論理的批評を加えたことでも知られ、著述も多い。また、半牀庵は久田家を代表する茶室で、江戸中期の千家長老久田宗全(1647-1707年)が好んだものとされている。江戸の中期は侘び茶にとって千利休(1522-1591年)の創設期に並ぶ中興の時期とされている。栄之助ならそういう謂れの茶室を自宅に写したとしても不思議の無い人物であろう。

一方で、栄之助が何時この茶席を建てたのかは定かではないが、1916年に39歳でピストル自殺をした年齢から考えて、明治末期から大正初期にかけての1910年前後であっただろうと推測できる。この時期は岡倉天心(1862-1913年)がボストン美術館で活躍の傍ら、*The Book of Tea* (1906年)などを出版し、1913年に50歳で病没する時期とも重なる。中央公会堂の着工が1912年であるから、活躍の舞台は異なるものの世界の中の日本を意識して文化の発揚を願った同時代人であった。

このように竹立庵を巡っては時空を越えた文化の営みが交錯している。本稿では茶道の持つ文化的意義に焦点を当て、竹立庵を巡る文化の諸相を明らかにしたい。§2では茶の湯の文化的意義について、伝統日本文化の多分野継承システムとしての茶の湯と*The Book of Tea*に見られる岡倉天心の茶の心の2つの側面から検討する。§3では竹立庵を巡る文化の諸相について、岩本栄之助、久田家半牀庵、そして千家長老久田宗全といった側面から検討する。

2. 茶の湯の文化的意義

2.1 伝統日本文化の多分野継承システムとしての茶の湯

茶の湯あるいは茶道の文化的価値についてこれまでも多くが語られてきた。しかし、伝統日本文化の広い分野にわたる維持継承機能については広く認識、評価されてきていないように思われる。今、世界に目をやれば、戦禍や政変のために多くの文化遺産や伝統技能が破壊されている。かろうじて生き延びたものも、異国の博物館などに移され、本来あるべき姿で目にできることは少ない。日本においても明治維新や高度経済成長の最中に多くの伝統が失われたことは心ある人々の知るところである。茶の湯の秘められた機能を再確認できればと思う。

茶の湯は多くの技能、技術に支えられて初めて成り立つ。これを逆に考えると、茶の

湯が存続すればそれを支える多くの技能、技術が存続して行くということである。茶碗、茶入、水差などの焼き物や棗などの塗り物、茶杓、茶筌や風炉、釜はじめ仕服、帛紗など。多くの名のある道具が伝えられ、名巧が継がれてゆくのも茶の湯があるからこそである。道具ばかりではない、茶室や庭には日本建築、造園の粋が集められている。茶花は放っておけば絶滅種になるかもしれないような草花を愛でる。和服は点前の格に応じ、また季節に応じて着物や帯の装いを改めるのが慣わしである。菓子や懷石料理もまた季節や茶会の趣向に応じて意匠も新たなものが供されたり、伝統のものが供されたりする。これら全てのものが、伝統の技能、技術によって支えられている。翻って、茶の湯はこれら伝統技能、技術の維持継承システムの働きをしていると言えるだろう。

このように、茶の湯を嗜むことはその精神性や学術性を持ち出すまでも無く、多大な貢献を伝統文化に果たしていることになる。岡倉天心縁のボストン美術館を訪ねたことがあるが、そこに展示された茶道具はなるほど大切にはされているのだろうが、茶会を知らずに見たならつまらないのではないかと改めて思った。未だに茶の湯は有閑の人の芸事のような認識が無きにしもあらずだが、日本伝統文化の維持、継承に幾重にも貢献していることを明記しておきたい。

2. 2 *The Book of Tea*に見られる岡倉天心の茶の心

前節で述べた茶の湯の総合芸術としての機能を最初に世界に問うたのが岡倉覚三（天心）の *The Book of Tea* 「茶の本」である。この本は1906年（明治39年）5月にニューヨークで出版された。天心はこの前年に42歳でボストン美術館中国日本部顧問として契約している。また、1904年には *The ideals of the East* 「東洋の理想」を、1905年には *The Awakening of Japan* 「日本の覚醒」をいずれも英語で出版している。本節では *The Book of Tea* の章を追って重要な箇所を引用して、天心の伝えようとした茶の心を見ていきたい。原著は周智のように英語である、紙数は多くなるが、対応する日本語の語彙も重要であるので筆者の日本語訳を付している。

第1章 *The Cup of Humanity* こころの茶—茶碗に込められた心

この章では日本文化の端々に茶の湯がどれだけ浸透してきたかを述べ、日常に芸術性や理想が浸透した状態こそ文明であると主張している。そして茶道に代表される文化を西洋の力の論理に対抗する「生の技」と位置づけている。

The long isolation of Japan from the rest of the world, so conducive to introspection, has been highly favourable to the development of Teism. Our home and habits, costume and cuisine, porcelain, lacquer, painting—our very literature—all have been subject to its influence. No student of Japanese culture could ever ignore its

presence. It has permeated the elegance of noble boudoirs, and entered the abode of the humble. Our peasants have learned to arrange flowers, our meanest labourer to offer his salutation to the rocks and waters.

日本が永く世界と鎖国していたことで自分たちを内省することができ、これは「茶道」の発達に都合が良かったのです。私たちの家屋、習慣、服装や料理、陶器、漆器、絵画—それに文学でさえ—何もかもが茶道の影響を受けてきたのです。日本文化の研究者はだれもその存在を無視できないのです。茶道は貴婦人の優雅な私邸の端々にまで浸透する一方で身分の低い人々の住居にも影響を与えてきました。農民も花を生けることを学び、身分の低い労働者も山水に敬意を払うことを学んできたのです。

Those who cannot feel the littleness of great things in themselves are apt to overlook the greatness of little things in others. The average Westerner, in his sleek complacency, will see in the tea ceremony but another instance of the thousand and one oddities which constitute the quaintness and childishness of the East to him. He was wont to regard Japan as barbarous while she indulged in the gentle arts of peace : he calls her civilised since she began to commit wholesale slaughter on Manchurian battlefields. Much comment has been given lately to the Code of the Samurai, —the Art of Death which makes our soldiers exult in self-sacrifice ; but scarcely any attention has been drawn to Teatism, which represents so much of our Art of Life. Fain would we remain barbarians, if our claim to civilisation were to be based on the gruesome glory of war. Fain would we await the time when due respect shall be paid to our art and ideals.

自分の心の中では大きなことが、本当はたいしたことではないことに気がつかないと、他人の小さなことの大きさを見逃してしまいがちです。一般の西洋人は茶の湯を見て、東洋のおかしな風習の一つにすぎないと軽くみています。彼らは日本人が平和的な芸術にふけっているときは野蛮国と見なしていましたが、満州戦線で大殺戮を始めると、文明国と呼ぶようになりました。

最近、武士道（兵士が自分を犠牲にしても戦う死の技）については盛んに話題になりますが、茶道は、それがまぎれもなく生の技であるにもかかわらず殆ど注目されません。もしおぞましい戦争の栄光が文明国の資格であるなら、我々は野蛮人のままで結構です。芸術や理想に当然の尊敬が払われるようになるまで待ちましょう。

第2章 The Schools of Tea 茶の流れ

この章では中国での茶の起こりから歴史的流れを追って、伝えられた日本で永く茶が洗練され、伝え続けてこられたことを解説している。

It is in the Japanese tea ceremony that we see the culmination of tea-ideals. Our successful resistance of the Mongol invasion in 1281 had enabled us to carry on the Sung movement so disastrously cut off in China itself through the nomadic inroad. Tea with us became more than an idealisation of the form of drinking ; it is a religion of the art of life. The beverage grew to be an excuse for the worship of purity and refinement, a sacred function at which the host and guest joined to produce for that occasion the utmost beatitude of the mundane. The tea-room was an oasis in the dreary waste of existence where weary travellers could meet to drink from the common spring of art-appreciation. The ceremony was an improvised drama whose plot was woven about the tea, the flowers, and the paintings. Not a colour to disturb the tone of the room, not a sound to mar the rhythm of things, not a gesture to obtrude on the harmony, not a word to break the unity of the surroundings, all movements to be performed simply and naturally—such were the aims of the tea-ceremony. And strangely enough it was often successful. A subtle philosophy lay behind it all. Teaism was Taoism in disguise.

日本の茶の湯にこそ茶の理想の最高峰を見ることができます。中国では遊牧民の侵略のために宋の文化運動は不幸にして中断したのですが、わが国は1281年の元寇の反撃に成功したのでその文化運動を続行できたのです。私たちの茶は飲む形式の理想化以上のものになっています。生の技の宗教になっているのです。茶という飲み物が純粹と洗練を崇拜することの口実となり、亭主と客とが現世の至福の時を協力して作り出す神聖な儀式となったのです。茶室は日々の暮らしのわびしい荒野のオアシスであり、そこで出会った疲れ果てた旅人は芸術鑑賞という共通の泉で喉を潤せたのです。茶会は茶、花、絵画をめぐる織り成されるプロットによる即興のドラマでした。茶室のトーンを乱す色も無く、諸々のリズムを損なう音も無く、調和をかき乱す動作も無く、周囲の統一を破る言葉も無く、全ての所作が単純に自然に行われる—それが茶の湯の目的でした。そして不思議なことにそのようなことがしばしば成功したのです。その全ての背景には精緻な哲学があったのです。茶道は老子の思想が形を変えて現れたものだったのです。

第3章 Taoism and Zennism 老子の思想と禪

この章では茶の湯の背景としての老子の思想と禪とが取り上げられている。

The whole ideal of Teaism is a result of this Zen conception of greatness in the smallest incidents of life. Taoism furnished the basis for aesthetic ideals, Zennism made them practical.

茶道全体の理想は日常の些細な出来事の中に偉大さを認識する禅の考えの結果なのです。老子の思想は審美的理想の基礎を形作り、禅がそれを具体化したのです。

第4章 The Tea-room 茶室

この章では数奇屋の茶室がその独特の様式によってどのような機能を持っているのかについて述べられている。利休が茶室の露地の理想として藤原定家の和歌「見渡せば花も紅葉もなかりけり 浦のともやの 秋の夕暮れ」を引用していることにも触れている。

The simplicity of the tea-room and its freedom from vulgarity make it truly a sanctuary from the vexations of the outer world.

その簡素さと俗世からの開放が茶室を外界の煩わしさから逃れた本当の聖域としています。

第5章 Art Appreciation 芸術鑑賞

この章では本稿の§2. 1でも述べたように、茶の湯の茶会が芸術鑑賞をも目的としていることが語られている。と同時に、戦国時代の終盤に千利休らをブレーンとした織田信長、豊臣秀吉によって茶器の価値が領土にも匹敵するという価値観が広められていたことが指摘されている。このことこそ武力の持つ「死の技」に対して茶の湯に代表される文化が「生の技」であると言える所以である。この価値観は江戸時代にまで継承されたが、謂わば、諸将が茶の湯に「現を抜かす」ことによって平和が維持されたと言っても過言ではない。

At the time when Teaism was in the ascendancy the Taiko's generals would be better satisfied with the present of a rare work of art than a large grant of territory as a reward of victory.

茶道が隆盛であった頃には太閤の將軍たちは戦勝の褒美として広大な領地よりは珍奇な芸術品を贈られる方が満足したものでした。

第6章 花 Flowers

この章では茶室の花が取り上げられている。次の豊臣秀吉と千利休の朝顔の逸話はあまりにも有名である。

On the tokonoma, in a rare bronze of Sung workmanship, lay a single morning-glory—the queen of the whole garden!

床の間には宋の細工になる珍しい青銅の器にたった一輪、庭の女王とも言うべき朝顔が生けられていました。

第7章 茶の宗匠 Tea-Masters

この章では茶の宗匠について語られているが、その自らを芸術そのものに高めようとする心は次に引用した利休最後の日のエピソードにも表れている。これが *The Book of Tea* のエピローグであるというのも心憎い。また、目指した簡素だが内部には最も力の充実した生命の美しさがある、厳粛な内攻的な充実した強靱な美しさを、利休が次の和歌に託して表していることも紹介されている。藤原家隆「花をのみ 待つらん人に山里の 雪間の草の春を見せばや」

On the day destined for his self-immolation, Rikiu invited his chief disciples to a last tea-ceremony. Mournfully at the appointed time the guests met at the portico. As they look into the garden path the trees seem to shudder, and in the rustling of their leaves are heard the whispers of homeless ghosts. Like solemn sentinels before the gates of Hades stand the grey stone lanterns. A wave of rare incense is wafted from the tea-room ; it is the summons which bids the guests to enter. One by one they advance and take their places. In the tokonoma hangs a kakemon, —a wonderful writing by an ancient monk dealing with the evanescence of all earthly things. The singing kettle, as it boils over the brazier, sounds like some cicada pouring forth his woes to departing summer. Soon the host enters the room. Each in turn is served with tea, and each in turn silently drains his cup, the host last of all. according to established etiquette, the chief guest now asks permission to examine the tea-equipage. Rikiu places the various articles before them, with the kakemono. After all have expressed admiration of their beauty, Rikiu presents one of them to each of the assembled company as a souvenir. The bowl alone he keeps. "Never again shall this cup, polluted by the lips of misfortune, be used by man." He speaks, and breaks the vessel into fragments.

The ceremony is over ; the guests with difficulty restraining their tears, take their last farewell and leave the room. One only, the nearest and dearest, is requested to remain and witness the end. Rikiu then removes his tea-gown and carefully folds it upon the mat, thereby disclosing the immaculate white death robe which it had hitherto concealed. Tenderly he gazes on the shining blade of the fatal dagger, and in exquisite verse thus addresses it :

"Welcome to thee, O sword of eternity ! Through Buddha And through Daruma alike Thou hast cleft thy way."

With a smile upon his face Rikiu passed forth into the unknown.

自ら犠牲となる運命の日に、利休は主だった弟子達を最後の茶会に招きました。定

められた時刻に客は悲しみに打ち沈んで待合に集まりました。露地に目をやれば木々も戦慄しているようで、木の葉のそよぎも家のない亡霊のささやきのように聞こえて来ます。黄泉の国の門に立ついかめしい歩哨のように灰色の石燈籠が立っています。珍香が茶室から漂ってきています。客に入室を勧める合図です。一人、また一人と進み出て席に着きます。床の間には掛け物がかかっています。古の僧侶の筆による見事な書で、現世のはかなさを表しています。風炉の茶釜が沸く音は蟬が行く夏を惜しんで悲しみを浴びせるように鳴いているように聞こえます。すぐに主人が室に入ります。各々が順に茶を勧められ、順に無言で飲み干して、主人が最後に飲みます。決められた作法に従って、正客が茶器の拝見を請います。利休は掛け物と共にみなの前に種々の品々を置きます。みなが茶器の美しさを賞賛して後、利休はここに会した一同の一人一人に土産として一つ一つ手渡しました。茶碗だけは手元に留めました。「不幸の者の唇によって汚されたこの茶碗が二度と使われることがないように。」このように言って、器を粉々に割ってしまいました。

儀式は終わりました。客は涙を抑えかねて、最後の挨拶をし、室を出ました。ただ一人、一番親しく心許していた者が、留まって最後を見届けるように請われました。利休は茶羽織を脱いで畳の上に丁寧にたたみます、するとこれまで隠されていた純白の死装束になります。静かに宿命の短剣の輝く刃を眺めて、次のように辞世の句を詠みます。

人生七十 力困希咄 吾が這の宝剑 祖仏共に殺す

顔に笑みをうかべて利休は未知の世界へと去って行ったのです。

3. 竹立庵を巡る文化の諸相

3. 1 岩本栄之助

既に紹介したように、大手前大学西宮キャンパスのアートセンター敷地内にある草庵様式の茶室「竹立庵」は岩本栄之助の別邸のものだった。栄之助は大阪北浜の株仲買人として成功し、中央公会堂（中之島公会堂）を寄付したことで知られている。明治10年（1877年）に両替商の岩本栄蔵の次男として生まれたが、大阪市立商業学校（大阪市立大学の前身）を卒業した頃、兄が亡くなり家業を手伝うようになり、明治39年に家督を相続している。

その直後から株仲買人として名声を上げることになる。明治40年、日露戦争後の暴騰相場で窮地にあった北浜の仲買人仲間を大株主であった大阪株式取引所（大阪証券取引所の前身）の株を売りつくして救ったエピソードが知られている。このような経験から、何時無くなってしまうとも限らない資産を何か社会に役立てておきたいと思うようになったようである。そして、明治42年に渡米実業団に参加したことが中央公会堂の寄付

につながっていったといわれている。この時にアメリカで富豪が公共事業や慈善事業に私産を投じていることに感動して、明治44年に100万円の寄付を公表することになった。

1914年に第一次世界大戦が勃発し、その後暴騰した株に万策尽きて1916年（大正5年）10月22日に店の自室でピストル自殺を図り、他界したというのが事実のようである。あまりにも綺麗過ぎたゆえの最後と惜しまれた。

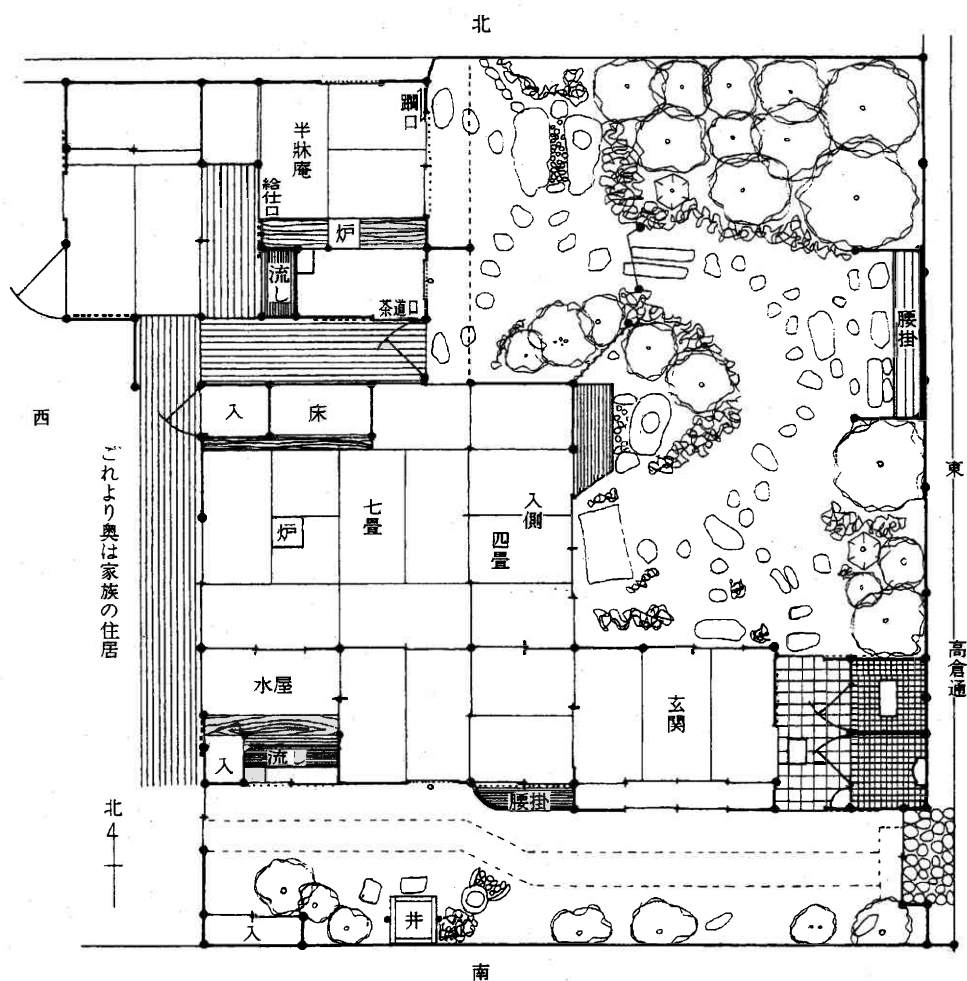
一方、中央公会堂は1913年に着工、栄之助の死後1918年に落成した。様々な講演会や文化事業に使われてきたが、老朽化が進み市民の支援もあって改修され、2002年に再オープンした。今もそのネオ・ルネサンス風の威容を誇っている。

3. 2 久田家半牀庵

大手前大学茶室「竹立庵」はアートセンターの建設に当たってその敷地にあった本屋と共に失われていた可能性もあったが、現大手前学園理事長福井有の意向もあって残された。阪神淡路大震災の後にも修復保存されて来たが、2004年に武者小路官休庵家元を客員教授に迎えるに当たってその実演の教場に当てるため整備された。筆者に多少の茶の湯の心得があるということで茶室維持の一部の任に当たらせていただいているが、その間に何か調べ物をしていた時にふと書物にあった写真が目に残り、竹立庵が半牀庵の写しなのではないかと考えるに至った。官休庵高畠茂氏を通じて確認していただいたところ、書面で見るとはほぼ間違いなさであろうとのお返事をいただいている。

竹立庵の本歌と思われる久田家半牀庵は§ 3. 2で述べる久田家中興の祖三代久田宗全が好んだとされる久田家を代表する茶室である。江戸時代の大火、兵火で焼失していたが、明治14年に旧規に従って復興された。岡田（1989）によれば半牀庵の由来は、白楽天の閑適の詩の一節、「南簷半牀日 暖臥因成睡」からであろうといわれているという。

以下は岡田（1989）の「久田家の配置図」や茶室内部の説明である。内部の説明には更に細かい寸法が挙げられているがここでは省略する。



[久田家の配置図]

躰口より上がると正面に台目の蹴込床があり、その左に給仕口がある。客席は床前の一畳畳と直角に台目畳二畳が敷かれ、42.4センチの中板を入れて広さは二畳よりも小間半宛広くて、ほぼ正方形である。この席は、表千家の不審庵と同じ位置に躰口、床の間、給仕口を持ち、かつ中柱や炉の配置も等しいので、不審庵の系統といわれるが、引き締まった不審庵の形に対してふっくらしたこの席の形は、不審庵に比べて間口が少し狭く奥行きが少し広いからであろう。三畳台目中柱の引き締まった席から一畳をとり、中板を入れて間口を小間半狭め、点前畳を一畳とし客席に台目畳二畳を入れて、奥行きを小間半広げてある。ゆっくりして、使いやすいであろう。

3. 3 千家長老久田宗全

久田家半牀庵を好んだとされる久田宗全は江戸中期の千家長老であり、久田家中興の祖とも言われている。久田家は久田実房と利休の妹との間に生まれた久田宗栄を初代とする。宗栄の子二代宗利は、利休の孫千宗旦（1578-1658）の娘、阿暮（おくれ）を妻

とした。その長子が三代宗全である。茶室半牀庵のほか、種々の細工物を好み、今日まで残っている。宗全籠は良く知られているが、茶碗、茶杓、一閑張などである。

宗全の弟は表千家を継いで五代宗佐隋流斎であるが早く没したため、宗全の長男が六代宗左覚々斎となった。この覚々斎の子供たち、すなわち宗全の孫たちが侘び茶の中興期を支えた表千家七代宗左天然如心斎、裏千家七代宗室竹叟最々斎、八代宗室一燈又玄斎である。宗全が千家長老といわれる所以である。天然如心斎と一燈又玄斎の兄弟は大徳寺の無学和尚の協力を得て七事式を制定するなどして千家の中興を果たしたことで知られている。

七事式については詳述を避けるが、江戸中期にあって茶禅一味の説、つまり茶の湯は単なる遊びや芸術に留まってはならない、何よりも人間形成の道、茶道でなくてはならないという考え方が確立したとされ、そのことが七事式に具現されたわけである。『碧巖録』にある「七事隨身」の禅の精神に因んで、花月・且座・廻り炭・廻り花・茶カブキ・一二三・貝茶の七種の具体的な修練の方式にまとめあげたという。この作業にはなかなかの苦労があったと伝えられ、門弟の川上不自、田沢宗掬、速水宗達らの意見が取り上げられたという。

4. おわりに

大手前大学西宮キャンパスアートセンター敷地内の竹立庵を巡る時空を越えた文化の営みについて、これまでに明らかになってきたことを中心に、茶道の持つ文化的意義にも焦点を当てて述べてきた。知るほどに茶室に込められた人々の思いの深さが身にしみる思いである。久田家半牀庵をこの茶室の本歌であると確認するにはさらに久田家に伝わる旧規を詳細に調べる必要がある。また、どのような経緯で岩本栄之助の茶室として半牀庵を写すことになったのかも謎のままである。今後の調査に委ねたい。

参考文献

- 井口海仙・永島福太郎（監修）（1979）『茶道辞典』、京都：淡交社。
岡倉覚三（著）（1939）*The Book of Tea*, 村岡博（注釈） 東京：研究社。
岡倉覚三（1992）*The Book of Tea*, 東京：研究社。
岡倉天心（著）（1998）『茶の本』、浅野晃（訳）東京：講談社インターナショナル。
岡倉天心（著）（1994）『茶の本』、桶谷秀昭（訳）東京：講談社。
岡倉天心（著）（1994）『茶の本』、立木智子（訳）京都：淡交社。
岡田孝男（1989）『京の茶室 千家・宮廷編』、京都：学芸出版。
産経新聞大阪本社社会部（2000）『大阪の20世紀』、大阪：東方出版。
千宗室（1977）『七事式』、裏千家茶道教書15、京都：淡交社。
千宗室（監修）（1999）『茶道文化論』、茶道学大系第1巻、熊倉功夫・田中秀隆（編集）京都：淡交社。

- 千宗室（監修）（1999）『茶道の歴史』、茶道学大系第2巻、谷端照夫（編集）京都：淡交社。
- 千宗室（監修）（2000）『茶の美術』、茶道学大系第5巻、谷晃（編集）京都：淡交社。
- 千宗室（監修）（2000）『茶室・露地』、茶道学大系第6巻、中村利則（編集）京都：淡交社。
- 千宗室（監修）（2001）『茶の古典』、茶道学大系第10巻、筒井紘一（編集）京都：淡交社。
- 千宗室（2001）『茶の心』、京都：淡交社。
- 千宗守（1994）『京と水』『京のほんまもん』、京都：京都新聞社。
- 西山松之助（校注）（1995）『南方録』、東京：岩波書店。
- 松嶋重雄（1996）『数奇屋設計考』、東京：理工学社。
- 吉田順一（1997）「消費における価値基準と文化論的アプローチ」、『国民経済雑誌』第176巻第1号。
- 吉田順一（1998）「もうひとつの《無印良品》考」『季刊マーケティング・ジャーナル』、69号
- Ikegami, Eiko (1995) *The Taming on the Samurai : Honorific Individualism and the Making of Modern Japan*, Harvard University Press.
- Plutschow, Herbert (2003) *Rediscovering Rikyu and the Beginnings of the Japanese Tea Ceremony*, Kent : Global Oriental.
- Soshitsu, Sen (1998) *The Japanese Way of Tea : from its Origins in China to Sen Rikyu* ; translated by V. Dixon Morris, University on Hawai'i Press.